

## Column 「ボロ織り」から見たもの

加藤 友子（神奈川大学日本常民文化研究所・職員）

経糸に麻か木綿糸、緯糸に細く裂いた木綿を織り込む「裂織り」。東北地方などに広く分布する織物であるが、数年前から手芸のリメイクやリサイクルといった点から注目を浴びている。

昨年の10月より私の職場である日本常民文化研究所では、布をテーマにした展示を催し、そこで数点の「裂織り」を紹介した。この「裂織り」は「ボロ織り」とも呼ばれ、祖母・白石はるじが所持していたものである。こたつ掛け、ふとん地、帯などとして昭和50年頃まで使用していたもので、きれいに洗濯されて大切に茶箱にしまわれていた。展示を担当した私は、布と女性に関係する多くの話を祖母から聞くことができた。

祖母が生まれ育った長野県佐久市内山（旧南佐久郡内山村）は、JR小海線中込駅から東へ15キロ程入った山間部である。かつては養蚕や炭焼きが生業であった地域である。木挽職の父、機織の母の間に8人兄弟の長女として明治39年に生まれた祖母は、口減らしのために9歳の時から子守り奉公に出され、12歳から25歳まで製糸工場の女工として働いていた。炭焼き検査員の白石甲子蔵と結婚後は、家や土地を借りて養蚕業も行ないながら6人の子供を育てあげた。こうした暮らしを支えたのが「ボロ織り」であった。祖母が用いた「ボロ織り」の材量は、どうしようもなく擦り切れて着られなくなった着物であり、紐状に裂くと10cm程で切れてしまう「ボロ」であった。祖母は死にかけた布を「ボロ織り」として再生したということになるが、もったいないとか資源リサイクルなどというレベルではなく、こうしなければ生きていけなかったという。

昭和30年代まで内山では「ボロ織り」を暮らしの中で使用していたことを祖母から聞き、ぜひ展示したいと思い、昨年の6月に「ボロ織り」の収集を試みたが、もうすでにほとんどの家で捨てられてしまっていて集めることができなかった。懐かしい温かみを持ちモザイク柄のような色彩の美しい「ボロ織り」がなぜ捨てられてしまうのだろうか。

祖母から聞いたこんな話を紹介しよう。昭和35年頃の冬、当時高校生であった祖母の娘が「かーやん、こたつのボロとっておいてな」とマチに住む友人を呼ぶ前の日に言った。内山から見てマチとは、街道沿いの野沢や白田、小諸のことである。マチの人はこたつのボロ＝ボロ織りの存在を知らない。貧乏を隠す娘ではなかったが、「ボロ」だけはとても恥ずかしく、マチの友人には見られなくなかったという。つまり、この地域では暗黙の内に「ボロ織り」を貧困の象徴として外には出せないものとして扱っていたのではないだろうか。仮に私がある家から「ボロ」を見つけたとする。そうすると、現在はそうでなくても「あの家も貧乏だったんかね」という烙印が押されるということになるのだろうか。このようにして「ボロ織り」の存在は隠され、捨てられる。

とある日、98歳になる祖母に「今まで生きてきたなかで、いつが一番幸せだった？」と尋ねると「そうさなあ～、糸とりさいってたころさな。ふとん持っていくわけではなく、ご飯は出るし、糸さえとってあればよかったからなあ。優等女で皆大事にしてくれたし、皆勤賞で筆筒さもらったしなあ。なんてってもかーやんや弟達さに金を自由にくれてやれたからなあ。とっても幸せだったあ。」と「ボロ織り」をなでながら意外な答えを返してきた。不自由なく息子夫婦と曾孫に囲まれた現在の暮らしよりも、自らの稼ぎで家族を守り養っていたころが幸せだったという。

糸とり・機織・仕立て...かつて女性の自立は、布に関係する職業に就くことで可能となった。一人の人間として認められた喜びなのか？女工のときにももらった皆勤賞の筆筒、暮らしを支えた「ボロ織り」を祖母が捨てられなかった本当の理由を垣間見たような気がした。



ボロ織り 木綿だけでなく、着古したセーター等の毛糸も、緯糸としてボロ織りに利用した。